

新入園児を迎える心

倉 橋 惣 三

『ことしもまた、おおぜいの幼児たちが入園して来た』

こう、われ／＼はいうのであるが、實は『ことしもまた』のもと『幼児たち』のたちとに、よく考えてみなければならぬ問題がある。櫻咲く春四月、たのしく、にぎやかに迎える心には變りはないが、うき／＼と花見の御連中を迎える心とは別のものがある。

ことしもという言葉には、去年おとしに關わりついているところがある。殊に、もの一字に、創立以來幾とせを重ねての、同じことのくりかえしという響がある。ことしもと此春を新しく思うところもないではないが、それは年々歳々花相同じの原則に立つてのことで、去年おとしに何の關わりもなく、ことしをこ

としとしてのみ生きている幼児に對しては、意味ないという以上、極めて當てはまらない心もちである。毎年の入園を、古くから引きつづいたもの、第何回と數えて繰りかえしているものとする、幼稚園側、つまりおとなの心もちである。ことしだけしか自分の入園のない幼児には、なんの關係もない話である。それもまあ、入園式としては、そう思うのも差支えないとして、ことしの新入園幼児を、去年おとしの幼児の引きつづき、繰りかえしと思つたら、とんでもないことである。年々歳々人相同じからずの哀調とは全く別の同じからずだが、新入園の幼児決して去年おとしの幼児ではない。それを同じもの——幼児というものが來ると思つたら大きな心得違ひであ

る。その心得違ひが、もの字のさせる淺い不注意であつたり、根深い誤謬になつたりする。心理學者の對象としては幼児というものがあるが、教育の實際の對象には、ことし初めて迎える太郎があり花子があるばかりだ。假りに同じ名の子であつても、ことしの太郎花子は、去年おとしの、あの太郎でも花子でもない。幼児というものとしたの共通性に屬するを常とはするが、それを、ことに、ことしも來たねで迎えられるは、第一どんなに面くらうことであらう。更に、教育としては、どんな思いがけぬ誤りをおかすことであらう。

もの字論議はこの位として、次は、幼児たちのたちである。おおぜい來るのだから數えておおぜいというはいゝ。しかし、そのおおぜいを一括して、幼児たち呼ばわりは、まだしも太郎花子を逸するものになる。たちで扱われるのは幼児というものの共通屬性においてある。幼児というものなどとは思つて居らず、別々の自分のみ思つている幼児にとつて、自分も君も、たちの中にはいつてい

るのかと、顔を見あわせずにいられます。それも入園式に着席させるには、たちで集まらせてたちでおじぎをさせてもいいかも知れないが、その翌日からの教育の實際の對象としては、たちなんといふものはあり得ない。たちの敬語の『皆さん』が口癖になつてゐる先生は、それほど深い譯あつてたちと呼びつけるのはあるまいけれども、そこから教育としての大きな誤に落ちること、或はも以上かも知れない。いくらもの字すきの先生でも、ことしの幼児はことしの幼児として新たに迎える心をもつだろうが、目の前に集つてゐるたちには、教育的錯覺を起し易いからである。たちで扱ひ通してたちで送り出す一たび教育の誤りも、始めのたちがもとになるのを戒めなければならぬ。

もで貫き、たちで束ねては、心理學の問題にはなるとしても、それだけで實際教育は出来ない。その幼児心理學にしても、第一篇幼児心理通性論、第二篇幼児個性論と揃へることは忘れないが、どうも従來の學としては、通性がもとで、そ

の中に個性があると思わせる説き方をす。そこで、初學者には、幼児というものが先ずあつて、その中に個々の幼児があるように思ひこませたりする。そうして、先ず實體の個の幼児を見る目も、感じる心も失わせたりさへすることがある。それは、心理學としてはとにかく、教育の實際にとつては、危険極まることである。屢々、その教育に致命的誤謬を興えるほど危険である。況して、自ら教育實際家を以て任ずる幼稚園の先生がもやたちで新入園児を迎えてなんとしよう。そんな迎え方は、幼稚園の經營者や管理者や、町のしろうとならとにか、苟も幼児教育のくろうとの心ではない。

新入園児を迎えるに當つて、くろうとの先ず思ふことは、ことしはどんな子が来るだろうかということであつた。それも、たゞ、あんな子か、こんな子かの見當だけではなく、いゝ子が来ればいゝ、悪い子でなければいゝという、注文などは勿論なく、一人々々、どんな子が来るだろうかという待ち受け心であつた。幼稚園だもの、幼児というものが来るのは

きまつてゐる。そんなこと、教育的に迎える心でもなんでもない。教育實際家の迎える必は、もつとこまかい。一人々々を迎えないで、なんの實際に迎へる心であらう。この心を裏からもつと綿密にいへば、一人々々のどんな子をも、一人々々こんな子であるとして迎へたい心である。

新入園児を迎へるに當つて、ほんとうの教育實際家の胸はわく／＼してゐた。ことしはどんな子が来るだろうかと思へばわく／＼せずにはゐられない。そのどんな子かを、一人々々とりちがえてはならぬと思へば、わく／＼以上はら／＼せずにはゐられない。とうとうと、心配ばかりのようでもあるが、教育實際家として頭と腕に自信のあるものには、そこにこそ楽しみがあるというものである。その心配と楽しみとの錯綜するところに、常に教育の教しみの實際家らしい、若々しいわく／＼もはら／＼も起る譯である。もとたちで片づける所謂年功者、自稱熟達者に、らく／＼だけあつて、わく／＼もはら／＼すらもないのは幸福とすべきか、不幸とす

べきかは、どう考えようと、その人の勝手である。

序にもう一つ、『入園し来る』の入園についても、前のもやたちとは少し意味が異なるが問題がある。それは、幼児というものにしても、どの一人々の幼児にしても、たゞそのありのまゝで来るのではなく、入園という条件つきの心境で来る点である。条件つきの心境ということ、幼児においてはおとなの如く強いことではないとしても、決して平氣ではあり得ない。殊に神経質な子にとつては苦しい影響を考えずにはいない。入園當座ホビヤ・ヌクツルヌスを起す子さえある位である。ところで、入園の心境なものは、わが家から別のところの新しい刺戟によることも大きい、別のところといつて、ピクニックの春の野邊とはちがう。公園とも動物園ともちがう。そういうところでは、新しい刺戟によつて、却てその子のありのまゝを發揮させることもある。入園はそうでない。幼稚園という、子どものためとはいゝながら、特別におとなが作つた特別の世界へ、とにかく、あらたまつて入園するのである。進歩的な幼稚園、進歩的などといわれないで、心ある幼児教育者なら、その特別の世界を、出来るだけ特別の世界として感じさせないように意を用いる。それでも、やわらかい幼児の感性には、その世界の空氣の中に、酸素か窒素かいずれにせよ、必ず含有されている教育が感ぜられずにいまい。先生の目に教育的暗さが見えたりするときは勿論、先生の笑顔にも、教育の太陽の眩しさがあることもあろう。幼稚園は子どもの社會的刺戟が強すぎるという評もあるが、それが、子どもだけの純の世界ならたいしたことはない。つまりは、その世界のうしろにいる先生によることである。まして、前景におし出た先生からの刺戟は決してこわいなどいうことではないが、うぶな幼児を、それこそ、わく／＼或ははら／＼させることも多からう。

心ある先生が、入園式の第一印象から入園當時の生活に就て、如何に苦心するかの実際は、こゝでは問題にしない。こゝで問題にするのは、新入園児を迎える

心として、一人々々を、どういう子かを迎えたい心として、入園という条件つき心境を計算にいれないで、その子を見てはならぬ點である。その子が眞にどういう子かを知るうえに、先生にとつて大きな力をもつものは、その子への初印象、始めの觀察である。それで、その子を解了つたと思ふ先生はないとしても、それが、先入主となることは免れない。その先入主をつくるものから、その子の條件つき心境を、こまやかに察し、同情深く理解し、假りにも新入園當時を以てその子を斷定しないように心がける必要がある。

新入園児を迎えるに當つて、どうしたら『幼稚園の子』にすることが出来るだろうか。殊に、どうして早くそうしようかと思ふのは、必ずしも正しくない。つまり幼稚園の子にならせたいところもあり、また、そうなるのでもあるが、新入園児を迎える心としては、寧ろその反對である。どうしたら、幼稚園を幼児のものにすることが出来ようか、という心である。(二二頁へ)

る。氣をつけて見るとまことに面白い。幼児にはそんなことは分らないが、見るとだけは見させるにこしたことはなし。

それで花にはそれ／＼、集まる虫がきまつている。ふじの花にははち、あぶ、つづじには蝶、かきの花では蜜蜂、栗の花にははえやあぶなどが集まっていることが多い。大體、白い花には夜、がが多く集まり、派手な花には蜜蜂や蝶、悪い臭を出す花にははえの集まることが多いものである。どんな花にどんな虫が来るか、注意させることも面白い。

てんとうむしがどんなところにいるか。ありはどんなことをしているか、幼児は小さな虫にもよく注意するものである。

(3) 花壇にいろ／＼の草花をつくつたり、そらまめ、えんどう、きうりやかぼちやまたトマトやナス、或るいはじやがいもやさといも、さつまいもなどを栽培して幼児とともに草とりをしたり水をやつたりすることは幼稚園の庭がせまくとも、多少工夫すれば出来る。また瓦鉢でもお菓子箱でもよい、土を入れてあさがおの種子をまいて世話させる位はどこの幼稚園でも必ずさせたいものである。

〔二九頁から〕

これをつとめていえば、幼児を幼稚園へでなく、幼稚園を幼児へである。もつと、くつきりしたい、かたをすれば、幼児に幼稚園を作らせるのである。ことしの幼児に、ことしの幼稚園を作らせるのである。つまり幼児を古い幼稚園へ押し込むのでなく、新しい幼稚園を幼児に與えようとしてこそ、新入園児を迎える眞の心ではあるまいか。

といつて、幼児の御きげんをとるというのでもなく、幼児のわがまゝを放任するといふのでもない。苟も幼稚園たる以上れつきとした教育目的を失わない。それでこそ幼稚園に入れるのであり、親も亦、幼児を幼稚園に通わせるのである。しかし、その新入園児を迎える心としては、どこまでも、その子をその子として迎える心である。先ずこの心で迎えることなしに、眞にその子を幼稚園に入園させることは出来ない。——新しく来る一人々々の子。これを離れて新入園児を迎える心はない。

(東京文理大兒童研究會『兒童研究』昨年四月號所載抜録)

X X X X X

X X X X X